國學院大學学術情報リポジトリ

「玉鬘物語」における玉鬘の女手「ほのか…」の象徴性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小野, 真樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001516

「玉鬘物語」における玉鬘の女手「ほのか…」の象徴性

小野真樹

論文要旨

玉鬘は六条院のヒロインとして源氏に迎えられるが、彼女の女手は、そういう姫君にふさわしく芳しいものに評されていない。彼女の女手への評は三箇所で、どれも、第一印象として「ほのか」と評され、それ自体に筆跡の巧拙をいう意味はなく、むしろ男を心もとなく思わせる効力を有している。だが、最初の二箇所は「ほのか」云々であって、云々の部分が芳しいとは言えない。源氏は「御心おちゐにけり」程度だし、蛍宮は「手をいますこしゆゑづけたらば」と落胆の体を見せる。さらには「玉鬘物語」は少々複雑で、玉鬘は正編では成功譚の「物語の比類なきヒロイン」として収束するが、続編竹河巻では現実味を帯びた大臣家の未亡人として失敗譚に終わる。これを完璧な成功譚である「明石の君物語」と対比してみると、「源氏同族の物語」対「内大臣家の血筋の物語」という構図が見えてくる。そこでは後者は常に敗者で、玉鬘も血筋の宿命を負っていた。そのことを玉鬘の女手は暗示的に象徴していたと考える。

一、はじめに

かつて筆者は「玉鬘巻の和歌リテラシー」として、玉鬘の和歌の能力が、物語の展開を促す機能を果たしていることを論じた。[1] だが、「和歌リテラシー」という場合、それは必ずしも和歌を詠む能力だけを意味するとは限らない。幅広く、和歌を書く能力や紙の質や色に配慮し香を染ませ折り枝を選ぶ嗜みまでを含んでいる。今回はそのうちの和歌を書く能力、つまり、玉鬘の女手に焦点を当ててみた

い。

女手に関する論文としては、久曽神昇氏は『源氏物語』における書状を詳細に分類している。書状の総数は二七一通で形態別の内訳は、文のみ七三通（二七％）、文と和歌三九通（一四％）、和歌のみ一五九通（五九％）である。すべて女手によるという。つぎに、主要人物ごとに、筆跡、料紙、折り枝の描かれ方を摘出している。[2]

このことを和歌の注記として捉えたのが、伊藤博氏で、（A）和歌ないしは和歌を含む消息等の筆跡や書風等についての批評、（B）和歌の内容についての説明・批評、（C）和歌の優劣についての批評、（D）注記を欠くものに分類している。（D）が一番多く、（A）（B）（C）のなかでは（A）が多いのだが、氏は（A）（B）（C）を主題や場面展開に寄与するものととらえ、（A）（B）（C）対（D）の比率に着目し、前者の比率が最も高かったのは玉鬘十帖であったとする。六条院の解体が始まる若菜巻以降その比率を減じていくという。「玉鬘十帖のあたりで、和歌の筆跡への評価が他の部分に比し、詳細になされている」といい、「和歌注記の意義と可能性はすでに玉鬘十帖で実験済みのものとして、主題や物語展開に必要な限りに矮小化されて、施されるに至ったものと思われる」[3]と締めくくっている。網羅的であることに難はあるが、「主題や物語展開」とのかかわりで捉える視点には注目する。

従来、筆跡は和歌を論ずる場合に付随的に論じられることが多く、筆跡を主に論ずるとなると、梅枝巻の源氏書論を文化論的に扱うようなものであったと思われる。[4]

一方、朴英美氏は玉鬘の女手「ほのか」という墨の薄さに焦点を当て、作中人物の心理表現の手法として詳細に分析しており、[5]傾聴したい。筆者は同じ玉鬘の女手を対象としながら、伊藤氏が具体的には示さなかった女手の「主題や物語展開」とのかかわりという観点から論じる。読者にとって和歌はそれを理解するにはそれなりの知識と時間を要するが、和歌に付随する女手評は数語の感覚的な言葉で表されるので簡単に読み過ごしてしまいがちだ。だが、ときには和歌よりも深い意味を暗示する場合がある。

それが玉鬘の女手である。そこに入る前に、玉鬘の女手は論評の対象となっていない梅枝巻の源氏書論を見ておきたい。

「よろづのこと、昔には劣りざまに、浅くなりゆく世の末なれど、仮名のみなん今の世はいと際なくなりたる。（中略）女手を心に入れて習ひし盛りに、こともなき手本多く集へたりし中に、①中宮の母御息所の、心にも入れず走り書いたまへりし一行ばかり、

わざとならぬを得て、際ことにおぼえしはや。（中略）宮の御手は、こまかにをかしげなれど、かどや後れたらん」と、うちささめきて聞こえたまふ。「故入道の宮の御手は、いとけしき深うなまめきたる筋はありしかど、弱きところありて、にほひぞ少なかりし。院の尚侍こそ今の世の上手にはおはすれど、あまりそぼれて癖ぞ添ひためる。②さはありとも、かの君と、前斎院と、ここにとこそは書きたまはめ」とゆるしきこえたまへば、（後略）[6]。（四一五～四一六頁）

波線部「仮名のみなん今の世はいと際なくなりたる」を代表したのが傍線部①故六条御息所で、現役では傍線部②朧月夜の君、朝顔の君、紫の上の御三方だという。朝顔の君と紫の上には具体的な批評はないが、秋好中宮、故藤壺入道、朧月夜の君には褒めた後で欠点も述べている。源氏の高い見識からは高貴な姫君といえど誰にも寛大な評ばかりではない。女手を活用する『源氏物語』のリアリティである。源氏が何にでも第一人者であることは暗黙の了解であるが、女手もしかりである。

書論に見える女君達は皆大臣家あるいは皇室の血を引く高貴な方々ばかりである。玉鬘はと言えば、頭中将の落とし子で、大宰府に赴任した乳母一家に育てられ、二十歳頃までを筑紫地方で過ごした経歴を持つ。当時の中央貴族の価値観からは、右の高貴な女君達と対等に並び得ないのは当然といえよう。とはいえ、父頭中将は左大臣と皇女大宮の嫡男で、源氏に六条院のヒロインとして迎えられ世間の話題となる姫君である。そういう姫君の属性として、女手の芳しい評がなされてもいいと思うのであるが、源氏の目はそう甘くはない。玉鬘の女手は別の箇所で、「ほのか…」と評される。「ほのか」自体は女手の巧拙をいう言葉ではないが、それに続く下文からは決して芳しい意味にはとれないのである。他方、同様に源氏書論から外されている明石の君も地方育ちで、都の高貴な女君達とは並び得ないのだが、女手評は「上衆めきたり」と芳しく、都の高貴な方々に劣らないという。梅枝巻の源氏書論は、女手においても源氏が第一人者であることを示すもので、その源氏が二人に下した評価がいいかげんなものであるはずがない。

「玉鬘物語」は正編のなかの主要な物語の一つで正編内において終了したかのように見せるが、続編の竹河巻で玉鬘は再度主人公として登場し完となる。なぜ再登場するのかと言えば、作者は玉鬘の宿命を書き残しておいたからだと考える。その宿命は正編では気づかないが、彼女の女手に暗示的に象徴されていたと考える。それを明らかにするのが本論のテーマである。この象徴性については明石の君の女手も有すると考え、こちらは複雑ではないので、先に、明石の君の女手と「明石の君物語」の関係を見ておきたい。

二、源氏による最初の明石の君の女手への評

経緯は省くとして、明石巻において、源氏は明石入道の誘いにのって娘に文を遣わした。しかし、返しは入道の代筆となり、それでは満足しない源氏は、再度文を遣わすのであった。

またの日、「宣旨書きは見知らずなん」とて、

「いぶせくも心にものをなやむかなやよやいかにと問ふ人もなみ

言ひがたみ」と、この度は、いといたうなよびたる薄様に、いとうつくしげに書きたまへり。若き人のめでざらむも、いとあまりに埋れいたからむ、めでたしとは見れど、なずらひならぬ身のほどのいみじうかひなければ、なかなか、世にあるものと尋ね知りたまふにつけて涙ぐまれて、さらに例の動なきを、せめて言はれて、浅からずしめたる紫の紙に、墨つき濃く薄く紛らはして、

思ふらん心のほどややよいかにまだ見ぬ人の聞きかなやまむ

手のさま書きたるさまなど、やむごとなき人にいたう劣るまじう上衆めきたり。（二四九～二五〇頁）

歌の贈答の如何については、明石の君は源氏の添え句「言ひがたみ」を付した詠みかけに上手く応じ得たと見てよいだろう。その女手については、傍線部「手のさま書きたるさまなど、やむごとなき人にいたう劣るまじう上衆めきたり」と評された。身分の低い者への評は語り手が代弁するようで、ここは源氏の評とみてよかろう。

「上衆めく」は『角川古語大辞典』（以後、『角川』）では、「動カ四『めく』は接尾語。貴人らしくふるまう。かたわらから見て貴人らしく見える」とあり、この箇所を例文に挙げている。『源氏物語』に四例見られる。基本的には物腰に関して貴人らしく見える、振るまうという意味だが、それが当該例のように書きざまに言われたり、琴の弾きざまに言われたりする。『源氏物語』の四例は、初例が桐壺更衣についてで、あとの三例はすべて明石の君についてである。[7]

明石の君の三例のうちの一例目が当該箇所で、二例目は同巻の明石の君の箏の琴の弾きざまについてである。

入道、えたへで箏の琴取りてさし入れたり。みづから（明石の君：筆者注）もいとど涙さへそそのかされて、とどむべき方なき

にさそはるるなるべし、忍びやかに調べたるほどいと上衆めきたり。（二六六頁）

明石の君は身分は低いが、女手においても、箏の琴においても、まるで高貴な人と思わせるような優れた技量をみせるのであった。

三例目は、松風の巻で、明石の君の振舞いについてである。

「（前略）いづら。などもろともに出でては惜しみたまはぬ。さらばこそ人心地もせめ」とのたまへば、うち笑ひて、女君にかくなむと聞こゆ。なかなかもの思ひ乱れて臥したれば、とみにしも動かれず。あまり上衆めかしと思したり。人々もかたはらいたがれば、しぶしぶにゐざり出でて、几帳にはたかくれたるかたはら目、いみじうなまめいてよしあり、たをやぎたるけはひ、皇女たちと言はむにも足りぬべし。（四一六頁）

源氏は大堰邸を退出しようとして、なかなか見送りに現れない明石の君を傍線部「あまり上衆めかし」と思うのであったが、これは「上衆めく」が形容詞化した言葉である。女房たちが困りはてているので明石の君はしぶしぶゐざり出て来るのであるが、この後語り手はこともあろうに、二重線部「たをやぎたるけはひ、皇女たちと言はむにも足りぬべし」と言い加えた。この「皇女」云々には一考を要したい。

『新編』頭注は「源氏が『あまり上衆めかし』と思ったのに対して、語り手が、明石の君を最高にほめた」と解説するが、受領の娘に「皇女」という言葉を使った理由としては説得力に欠ける。筆者はこれは語り手による暗示的予言だと考える。源氏には澪標巻の宿曜の予言「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし。中の劣りは太政大臣にて位を極むべし」（二八五頁）があったが、語り手は「皇女」云々の言葉をもって、読者に明石の君の成功を暗示的に予言したと考える。ここ大堰の邸は明石の君の母君の祖父中務宮伝来のもので、母方の出自をたどれば、皇統に繋がる。中宮となる姫君の母としてそなわるべきこの上ない品格を示したのである。「皇女」云々を導いたのは源氏の「上衆めかし」であり、元をたどれば女手の「上衆めきたり」であった。

明石の君は明石一族の野望を一身に背負う壮大な物語のヒロインであるが、彼女の女手にその成功が象徴的に暗示されていたと考える。桐壺更衣は明石の君の叔母になるのだから、「上衆めく／めかし」は明石一族の女性にのみ使われた言葉ということになる。この言葉の希少さからいっても象徴性を読み取ってもよいのではないか。

三、源氏による最初の玉鬘の女手への評

さて、標題に載せる玉鬘の女手「ほのか…」の分析に入ろう。筆者の論点は「ほのか」につづく下文を含めた玉鬘の女手評（それゆえ「ほのか…」とする）の「玉鬘物語」における象徴性である。

玉鬘巻において、源氏は右近から「はかなく消えたまひにし夕顔の露の御ゆかりをなむ見たまへつけたりし」（１２０頁）と告げられ、その上、「（母夕顔よりも：筆者注）こよなうこそ生ひまさりて見えたまひしか」（１２１頁）と告げられた。源氏は「さらば、かの人、このわたりに渡いたてまつらん」（同）と言うが、源氏には末摘花の失敗が思い起こされた。「かの末摘花の言ふかひなかりしを思し出づれば、さやうに沈みて生ひ出でたらむ人のありさまうしろめたくて、まづ文のけしきゆかしく思さるるなりけり」（１２３頁）とあるように、会う前にみずから玉鬘に文を贈るのであった。

「かく聞ゆるを

　知らずとも尋ねてしらむ三島江に生ふる三稜のすぢは絶えじを」

となむありける。

（中略）

唐の紙のいとかうばしきを取り出でて書かせたてまつる。

　数ならぬみくりやなにのすぢなればうきにしもかく根をとどめけむ

とのみほのかなり。手は、はかなだちて、よろぼはしけれど、あてはかにて口惜しからねば、御心おちゐにけり。（一一三～一一五頁）

右近が初瀬参りで偶然玉鬘と遭遇し、そのときの贈答歌のやりとりで、玉鬘の和歌リテラシーはすでに試されていた（一一六頁）。右近の段階は通過した。それに比べ、源氏が贈った歌はかなり難位度の高いものであった。この二つの贈答の解釈について筆者は別稿[8]で論じたので、ここでくり返すことはしないが、後者については簡単に触れておく。三稜と結びつく歌枕は三島江ではなく他にあり、[9]

その点をどう答えてくるか試されていた。玉鬘はその問題を地名を省くことで回避し、しかも、三稜が持つ男女の筋（関係）という意味を人生の筋に置き換え、体よくはぐらかして見せた。『源氏物語』では、作者の自讃と思われることを避けて、作中和歌を貶すことはあっても、褒めることはない。したがって、源氏に批判されない限り、歌は合格したのである。

問題は傍線部である。一読して気づくのは、明石の君の女手評との差異である。玉鬘も褒められてはいるが、いささか歯切れがよくない。

語り手の第一印象は「とのみほのかなり」とある。朴氏によれば、「ほのか」に書くことは、田舎育ちの欠点を隠そうとする気持ちや、あるいは、切り返しの強さを弱めようとする心理の表れという[10]。改めて語り手は「手は（筆跡は）」と始め、下文の前半は「はかなだちて、よろぼはしけれど」と否定的に評し、次にその逆接の接続助詞「ど」を受けて、「あてはかにて」と肯定的に言いなおしている。「あてはか」は『角川』によれば、「形動ナリ『あてやか』に同じ」とあって、そちらを引くと「高貴な様子であるさま」とある。明石の君の「上衆めきたり」と同じような意味だが、その後に「口惜しからねば御心おちゐにけり」と付加されているのが問題である。「（「あてはか」さにおいて）物足りないわけではないので安堵した」という意味で、およそ積極的な褒め方とは言い難い。これは末摘花の女手の酷さに比べれば十分まともで安堵したのであって、梅枝巻の源氏書論の高貴な女君達の女手を評する高い基準においてではない。ここも語り手の評だが、「御心おちゐにけり」と源氏の心中をいうので、源氏の代弁と見てよかろう。

明石巻の時点では、まだ、源氏と宰相（左大臣家の嫡男、かつての頭中将）の関係は、ともに右大臣家に対抗する味方同士であるが、以後対立関係に転じる。物語全体を通してみれば、歴史上の源氏と藤原摂関家の力関係とは逆の様相を見せている。物語では、光源氏が内大臣（歴史上の藤原摂関家に相当）を政治的に圧倒する[11]。後宮政策において娘を一人有するのみの源氏が、複数を有する内大臣に勝利したことがそれを決定づけた。内大臣は政治家として不向きには描かれていないが、一族内では、近江の君のような問題児もおり、長男柏木は密通発覚が原因で鬱屈死してしまうし、その昔には妹葵の上を出産後に亡くしていた。何かと運に恵まれない一族として描かれ、常に源氏方に対し劣勢である。源氏の母桐壺更衣と明石の君の父明石入道は従兄妹（姉弟）関係にあり、明石の君は源氏と同族である。他方、玉鬘は内大臣の頭中将時代の落とし子である。つまり、源氏方と内大臣家の優劣模様が、明石の君と玉鬘の女手にも反

映されていたという解釈も可能ではないか。

四、正編における玉鬘の女手三箇所の記述

『源氏物語』正編には、玉鬘の女手に関する記述が三箇所ある。一箇所目は前章で示した。二箇所目は、蛍巻において、源氏が蛍を放って玉鬘の姿を兵部卿宮（以後、蛍宮）に見せる趣向が試みられた日の翌日、五月五日のことである。前夜の源氏のいたずらで、宮の玉鬘への恋情は煽られていた。玉鬘に文が届く。源氏は玉鬘へ贈られてくる手紙の返事は自分で指図して女手の巧みな宰相の君に書かせていた（一九七頁）。だが、今回は自ら返事するようにと玉鬘に勧めた。

宮より御文あり。白き薄様にて、御手はいとよしありて書きなしたまへり。見るほどこそをかしかりけれ、まねび出づれば、ことなることなしや。

今日さへやひく人もなき水隠れに生ふるあやめのねのみなかれん

（中略）

「あらはれていとど浅くも見ゆるかなあやめもわかずなかれけるねの

若々しく」とばかりほのかにぞある。手をいますこしゆゑづけたらばと、宮は好ましき御心に、いささか飽かぬことと見たまひけむかし。（二〇四～二〇五頁）

玉鬘の歌の方は菖蒲にことよせて、切り返しの心得を見せているが、やはり、問題は女手である。傍線部「とばかりほのかにぞある」は一箇所目とほぼ同様で、違いは強調の助詞「ぞ」が付加されたことである。ここも語り手の評であるが、源氏から蛍宮に変わっても「ほのか」と繰り返すのは、誰にもそのような印象を与えるということであろう。「ぞ」には「同じく」というニュアンスが込められている。この「ほのか」に書くことも朴氏によれば一箇所目と同じ心理の表れだという。[12]

問題なのは、「手をいますこし」以下である。ここも「手」と始まるので、ここからが筆跡の巧拙に関わることになる。「飽かぬこと

と見たまひけむかし」は直訳すれば、「満足できぬことと御覧なさったようだ」ということになる。簡単にいえば、蛍宮は失望したのである。これについては深く考察してみたい。

蛍宮は源氏の風流を楽しむ無二の友であり理解者[13]であるので、源氏の女手が優れていることは日ごろの親しい交際のなかで知らないはずはないが、それが具体的に記述されるのは梅枝巻の源氏書論の後である。源氏は宮に明石の姫君の入内に際し持たせる書の手本を依頼し、それが出来上がったので宮は六条院に持参した。お互い書いたものを見せあうことになるが、結局は宮が源氏の女手に魅せられてしまう。

書きたまへる草子どもも、隠したまふべきならねば、取り出たまひて、かたみに御覧ず。唐の紙のいとすくみたるに、草書きたまへる、すぐれてめでたしと見たまふに、高麗の紙の、膚こまかに和うなつかしきが、色などははなやかならで、なまめきたるに、おほどかなる女手の、うるはしう心とどめてかきたまへる、たとふべき方なし。見たまふ人の涙さへ水茎に流れそふ心地して、飽く世あるまじきに、またここの紙屋の色紙の色あはひはなやかなるに、乱れたる草の歌を、筆にまかせて乱れかきたまへる、見どころ限りなし。（四一九～四二〇頁）

源氏の女手が称賛される箇所は多々あるが、ここが一番の箇所で、それが源氏の風流の一番の理解者である蛍宮によってなされている。それを確認した上で、前述の玉鬘の女手の二箇所目に戻ろう。この時点では蛍宮は玉鬘を源氏の実の娘と思い込んでいる。そこへ玉鬘の返しの文が届き開き見ると、源氏の娘とは思えない見劣りする女手であった。宮の認識する源氏の女手の「ゆゑ」は限りなく高い。「手をいますこしゆゑづけたらば」とは、父源氏の「ゆゑ」の片鱗を少しでも感じさせてくれたらよかろうに、という意味だ。宮は玉鬘を源氏の娘と思い込んでいるから期待が高すぎた。かといって玉鬘への恋情が薄らいだわけではない。このことは後で述べる。

思うに、源氏が宰相の君という代筆係を使わずにあえて玉鬘に自筆で贈るよう勧めたのは、風流のよき理解者である蛍宮の落胆を予想しての魂胆だった。つまり、源氏の評「あてはかにて口惜しからねば」（6頁）という、歯切れのよくない褒め方からは、本音は宮と同様に「手をいますこしゆゑづけたらば」だったと思われる。源氏は蛍宮に対して蛍火で恋情を煽り女手で少々落胆させるという業をやってのけた。これは後述するが、玉鬘を「くさはひ」として、六条院に集う「すき者ども」を弄ぼうとする源氏のもくろみの一端

である。

さて、三箇所目は藤袴巻で、玉鬘は尚侍として十月に出仕することが決まってしまった時のことである。この時点では玉鬘が内大臣の娘であることは世間に知れ渡っている。前月の九月には、懸想人たちの最後の望みを託した文が様々に届くのであった。蛍宮の文「朝日さす光を見ても玉笹の葉分けの霜を消たずもあらなむ」（三四四頁）もその一つで、それにのみ玉鬘はみずから返した。

宮の御返りをぞ、いかが思すらむ、ただいささかにて、

心もて光にむかふあふひだに朝おく霜をおのれやは消つ

とほのかなるを、いとめづらしと見たまふに、みづからはあはれを知りぬべき御気色にかけたまへれば、露ばかりなれどいとうれしかりけり。（三四五頁）

またもや玉鬘の女手は傍線部分「ほのか」であった。朴氏によれば、この「ほのか」は歌意から宮に過剰に期待させないためという。[14]「いとめづらし」とあるのは、前回五月五日の自筆の返しをもらって以後、宮は何度も文を贈ったであろうが、返ってこなかったからだと思われる。やっともらえた上に、この時ばかりは「あふひだに朝おく霜をおのれやは消つ」とあるように、「あはれを知りぬべき御気色」を表してくれたことだけでうれしく、宮が初めて玉鬘の自筆の返しを見た時の「手をいますこしゆゑづけたらば」（8頁）の女手はまったく気にならなくなってしまっている。源氏の娘でないことを知った以上、「ほのか」な女手を見るだけで十分感じ入っているのである。

これには「ほのか」のもう一つの効力を述べておかなければならない。帚木巻で左馬頭の弁として語られている。詳細に解釈してみよう。

容貌きたなげなく若やかなるほどの、（中略）文かけど、おほどかに言選りをし、①墨つきほのかに心もとなく思はせつつ、またさやかにも見てしがなとすべなく待たせ、わづかなる声聞くばかり言ひ寄れど、②息の下にひき入れ言少なるが、③いとよくもて隠すなりけり。④なよびかに女しと見ればあまり情にひきこめられて、とりなせばあだめく。⑤これをはじめの難とすべし。（六三頁）

傍線部①、女の「墨つきほのか」は男を「心もとなく思はせ」ると言う点に留意したい。「ほのか」は女手の巧拙を意味するものではないが、とにかく、男を「心もとなく」思わせる効力を有するのである。それは傍線部②、女の発声「息の下にひき入れ言少ななる」にも通じるという。これは声の「ほのか」である。ところが、傍線部③「いとよくもて隠すなりけり」とあって、「ほのか」が欠点を隠す隠れ蓑の場合があると言う。傍線部④は、「女し」に魅せられて入れ込むと、「あだめく」という。「あだめく」女は魅力だが、左馬頭はここでは妻選びの観点で語っているので、それには否定的で、傍線部⑤「はじめの難」という。どうであれ、女手の「ほのか」が、男を「心もとなく思わ」せる女の魅力となっていることは間違いない。

玉鬘の女手に三度くり返し「ほのか」が使われたのは、彼女には男を「心もとなく思はせ」る魅力があることを意味している。蛍宮は初めこそ、玉鬘が源氏の娘と思っているからその女手に落胆したが、「ほのか」な書きぶりは宮の心を捉えていた。そして、二度目は、源氏の娘でないことを知っているので「ゆゑ」足らずなど気にならず、「ほのか」に感極まったのである。

一箇所目の玉鬘の「ほのか」において、源氏こそ、これは男達を「心もとなく思わせ」るものだと感じたから、玉鬘を六条院の「くさはひ」にしようとの企てを思いついたのである。玉鬘巻において、源氏は六条院で初めて玉鬘と対面した直後に紫の上に次のように伝えている。

さる山がつの中に年経たれば、いかにいとほしげなるならんと侮りしを、かへりて心恥づかしきまでになむ見ゆる。かかるものありと、いかで人に知らせて、兵部卿宮などの、この籬の内好ましうしたまふ心乱りにしがな。すき者どもの、いとうるはしだちてのみこのわたりに見ゆるも、かかるもののくさはひのなきほどなり。いたうもてなしてしがな。なほうちあはぬ人の気色見あつめむ。（一三一頁）

容姿優れ歌も詠め、女手も「すき者ども」を「心もとなく思わせ」ることはできるというのが源氏の玉鬘への総合評価であった。ところで、左馬頭は声の「ほのか」にも触れていたが（10頁②）、夕顔巻で、母夕顔の声はこう描写されていた。

「夕露に紐とく花は玉ぼこのたよりに見えしえにこそありけれ

露の光やいかに」とのたまへば、後目に見おこせて、

「光有りと見し夕顔の上露はたそかれ時のそらめなりけり」

とほのかに言ふ。をかしと思しなす。（一六一～一六二頁）

源氏には、母夕顔のほのかな発声の記憶が残っていた。長い年月を経て、玉鬘巻で玉鬘を六条院に迎え、初対面した時のことである。

「脚立たず沈みそめはべりにける後、何ごともあるかなきかになむ」とほのかに聞こえたまふ声ぞ、昔人にいとよくおぼえ若びたりける。（一三〇～一三一頁）

順を追えば、源氏は玉鬘からの返しの文で、その女手に「ほのか」との印象を抱き、次に玉鬘の「ほのか」な声を聞いて、彼の記憶の中で母娘の声が重なった。「ほのか」は夕顔・玉鬘親子に受け継がれた属性なのである。末摘花巻の冒頭は「思へどもなほあかざりし夕顔の露に後れし心地を、年月経れど思し忘れず、（中略）け近くうちとけたりし、あはれに似るものなう恋しく思ほえたまふ」（二六五頁）で始まり、それは夕顔を亡くした翌年のことで、源氏十八歳であった。それから十七年後、源氏三十五歳、玉鬘巻の冒頭は「年月隔たりぬれど、飽かざりし夕顔をつゆ忘れたまはず、（中略）あらましかばとあはれに口惜しくのみ思し出づ」（八七頁）と同様の表現で始まっており、源氏にとって夕顔は絶対に忘れられない存在であった。その夕顔の記憶を呼び覚ますよすがとなっているのが玉鬘の声の「ほのか」であり、感慨ひときわなのである。「ほのか」という言葉は、『源氏物語』には百例以上見られ、当時の女君達はそのように発声するよう育てられているわけで、ありふれた言葉であるが、源氏には玉鬘の声「ほのか」は特別異なる響きとして聞き分けられたのである。

とはいっても、玉鬘の女手が蛍宮を落胆させた事実が消えるわけではない。宮は源氏の風流の一番の理解者であるから、宮の評価は源氏の評価に他ならない。明石の君の女手と比較した場合には、「ほのか…」に対する「上衆めきたり」では、厳然とした差異がある。そういうわけで三章末では、「源氏方と内大臣家の優劣模様が、明石の君と玉鬘の女手の能力にも反映されていた」と述べた。だが、それには一抹の疑義を感じないわけではない。内大臣家には外腹にもう一人近江の君がいて、常夏巻では、当時の和歌リテラシーからは逸脱した珍妙な歌を詠み、女手は「その筋とも見えず漂ひたる書きざま」（二四九頁）を見せるのであった。内大臣家の人品の欠陥は近江の君に十二分に表されており、彼女の存在意義は玉鬘の引き立て役である。ならば、六条院のヒロインである玉鬘が容姿麗しく

歌も詠めれば女手もとびきり上手という設定でもまったく違和感はなかったと思う。内大臣家の血筋ではあっても縁はうすいのだから。にもかかわらず、玉鬘の女手は「ほのか…」とそこそこのものに抑えられた。その意味するところは深そうに思われる。

五、「玉鬘物語」における蛍巻「物語談義」の意味

玉鬘十帖の四巻目に位置する蛍巻では、源氏と玉鬘との間で「物語談義」が交わされる。五月雨のうち続く時節に入り、六条院の女君達は物語などでつれづれを慰めていた。物語に熱中する一人が玉鬘なのであるが、自分のこれまでの人生と物語の姫君とを比較して、「さまざまにめづらかなる人の上などを、言ひ集めたる中にも、わがありさまのやうなるはなかりけり」（二一〇頁）と思う。直後の「主計頭がほとほとしかりけむなどぞ、かの監がゆゆしきを思しなづらへたまふ」とは、物語にあるのと同様の経験をしてきたといい、それどころか、今自分は物語以上のことを経験しているといいたいのだ。仮親が婿候補どもの懸想心を煽り立てながら、実際には自ら恋情を露わにするという今の六条院における異常な状況を暗に言っている。つまりは、自分は「物語の比類なき姫君」のようだと言うのである。

読み進むと、源氏は初め物語を女子供の読むものと見下し、「そらごとをよくし馴れた口つきよりぞ言ひ出すらむとおぼゆれどさしもあらじや」（二一一頁）と言うと、玉鬘に「げにいつはり馴れたる人や、さまざまにも酌みはべらむ。ただいとまことのこととこそ思うたまへられけれ」（二一一～二一二頁）と反撃され、一転して、「日本紀などはかたそばぞかし」（二一二頁）と歴史書を物語の下に置くかのような宗旨替えの発言をし、続けて、物語の真髄を語るのであった。

「その人の上とて、ありのままに言ひ出づることこそなけれ、よきもあしきも、世に経る人のありさまの、見るにも飽かず聞くにもあまることを、後の世にも言ひ伝へさせまほしきふしぶしを、心に籠めがたくて言ひおきはじめたるなり。よきさまに言ふとては、よきことのかぎりを選り出でて、人に従はむとては、またあしきさまのめづらしきことをとり集めたる、みなかたがたにつけたるこの世の外のことならずかし。（後略）」（同）

ここは、源氏の「物語談義」として有名な箇所で、これについては大別すると、「物語談義」をあくまでも談義の範囲でとらえる立場[15]と、「物語談義」に「物語論」としての新しさを見る立場[16]の二派がある。筆者は後者の立場を支持するのだが、作者が「物語談義」を挿入した元々の意図は単純であったろうと考え、その点では前者に属す。神野藤昭夫氏が「いわゆる物語論の条は、物語一般論が逸脱的に語られているのではなく、いわば、くどきそのものの論理をかかえこみつつ語られている[17]」というように、源氏は玉鬘の歓心を買うための流れで上記の条を語ったのである。その語りについて、筆者としては「物語論」に引き上げたい誘惑にかられるのだが、作者がそもそも言いたかったことを考えてみたい。

少々込み入るのは、作品の中では源氏と玉鬘は実在の人間で、彼らが世間の物語を語り合うのだが、読者にとっては、彼らも物語の作中人物であるのだから、源氏の前記のセリフは「良い面も悪い面も極端に描き尽くして初めて人間の本質が読者に迫ってくる、それが物語の神髄だ」と言っているわけだが、それは自分や玉鬘の描かれ方を言っていることになる。玉鬘十帖に入ってからのことに限って言えば、玉鬘を六条院に迎えて以来の源氏の描かれ方を言っているのであり、そういう良くも悪くもスパーヒーローである源氏の常軌を逸した思考・行動の下に置かれる玉鬘はたまったものではなかろう。彼女が「さまざまにめづらかなる人の上などを、言ひ集めたる中にも、わがありさまのやうなるはなかりけり」（13頁）というのは、筑前での太夫監の恐ろしさを乗り切った上に、六条院でのさらなる試練、仮親源氏の恋慕にさらされていることを言う。作者としては正編における玉鬘をそのように描き、それを見事に乗り切る玉鬘は「物語の比類なきヒロイン」であり、作者が源氏の「物語談義」を挿入したそもそもの意図はその点を強調することにあったと考える。なぜ強調しておきたかったのかと言えば、続編では玉鬘の描き方をまったく変えるからである。つまり、玉鬘は物語のヒロインではなくなるのである。

ところで、正編での「玉鬘物語」は結果的には、意にそまない鬚黒とのどんでん返しの結婚が印象深いので、失敗譚のように思われがちだが、歴とした成功譚である。鬚黒大将は若菜下巻において、冷泉帝の譲位で右大臣となり（一六五頁）、紅梅巻において、人臣として最高位の太政大臣に昇りつめていたことが知らされる（三九頁）。源氏の愛人としてよりも、蛍宮の妻としてよりも、そして、尚侍の君として冷泉帝の情を受けるよりも、結果としては鬚黒の妻となったことは最高の運をつかみ取ったことになる。鬚黒も夫を出

世させる妻を娶った幸運な男である。このことは玉鬘の女手に見られる「ほのか」さ、つまり、「心もとな」さでは説明がつき難い。この点は作者も心得ていた。

若菜下巻において、源氏は女三の宮の不始末にくらべ、鬚黒に乗り込まれた際の危機を賢く処理した玉鬘を次のように評するのであった。

右大臣の北の方の、とりたてたる後見もなく、幼くよりものはかなき世にさすらふるやうにて生ひ出でたまひけれど、かどかどしく労ありて、我もおほかたには親めきしかど、憎き心の添はぬにしもあらざりしを、なだらかにつれなくもてなして過ぐし、この大臣の、さる無心の女房に心あはせて入り来たりけむにも、けざやかにもて離れたるさまを人にも見え知られ、ことさらにゆるされたるありさまにしなして、わが心と罪あるにはなさずなりにしなど、今思へば、いかにかどあることなりけり、(後略)。(二六〇～二六一頁)

源氏の邪な行為をはぐらかし通し、加えて、鬚黒の略奪婚をスキャンダルにせず正式婚として納めてしまった玉鬘の冷静な判断を、源氏は傍線部「かどかどしく労ありて」「いかにかどあることなりけり」と評している。「ほのか」からは想像し難い属性である。だが、左馬頭の語ったことに立ち戻ってみれば、「ほのか」から正反対の「あだめく」に豹変する女もいるわけで、玉鬘が「ほのか」と「かどかどし」を併せ持っていたとしても不思議ではない。左馬頭が語るのは、妻に向かない女の例であったが、玉鬘はその逆で、鬚黒大将を太政大臣にまで出世させる賢婦といってよい。その辺の経緯はまったく省筆され、略奪婚されるまでの玉鬘の波乱万丈の人生がもっぱら描かれたので、「物語の比類なきヒロイン」という印象のみ強いが、成功譚のヒロインであることも忘れてはならないのである。

玉鬘が円熟した姿を見せるのが、若菜上巻の源氏の四十の賀を主催した場面で、ここからフェイドアウトし、これをもって「玉鬘物語」は『源氏物語』正編では、成功譚として収束する。もし、これで完結ならば、これほどのヒロインに蛍宮を落胆させるような女手が与えられたことは、やはりどうしても腑に落ちない。近江の君や末摘花の女手が酷いのは、烏滸な役回りの一環として妥当性があるが、玉鬘はそういう部類に属する姫君では決してない。にもかかわらず、彼女の女手を芳しいとはいいかねるものとしたことは、続編での玉鬘を襲う宿命に関わっていたと考える。

そこで注意したいのが、真木柱巻において、玉鬘が鬚黒の男子を出産したことについての柏木の述懐である。

宮仕にかひありてものしたまはましものをと、この若君のうつくしきにつけても、「今まで皇子たちのおはせぬ嘆きを見たてまつるに、いかに面目あらまし」とあまり事をぞ思ひてのたまふ。（三九七～三九八頁）

実姉である玉鬘が世継ぎの無い冷泉帝の皇子を生むこともあり得たと柏木は無念がるのであった。その思いは玉鬘も同じであったであろうが、それには触れられなかった。続編竹河巻はその触れられなかった玉鬘の思いに胚胎していた。正編ではもっぱら「物語の比類なきヒロイン」として描かれ、玉鬘の家政に勤しむ姿は省筆されていたが、続編では後者の側面が強調されて描かれることになる。玉鬘は「ほのか」と「かどかどし」を併せ持っていたと先に述べたが、続編では「かどかどし」の側面が前面に出てくることになる。だが、その「かどかどし」さが裏目となる。はっきり言ってしまえば、「玉鬘物語」は正編では歴とした成功譚であるが、続編は失敗譚として閉じられる。この成功譚から失敗譚への変質は、何を物語るのだろうか。玉鬘は内大臣家との関係は薄いので忘れがちになるが、内大臣の血を引く事実は重く、その宿命からは逃れられないということが作者の頑固なまでのテーマとして隠されていたと考える。内大臣家の不運を負う宿命は玉鬘にまで及ぶということか。

六、竹河巻における玉鬘の描かれ方と女手の四箇所目の記述

続編の初めに位置する匂兵部卿巻、紅梅巻、竹河巻は世に匂宮三帖と言う。源氏死後の後継を匂宮と薫に託し、彼らの初期の恋愛模様とともに、巻順に六条院、紅梅大納言家、鬚黒家の動向を描き、宇治十帖への橋渡しとなるものである。[18]

ところが、竹河巻だけは、正編でフェイドアウトした玉鬘が再登場し完結する巻で、薫も彼女の長女に恋する役回りで登場するが脇役に過ぎず、主人公はあくまでも玉鬘となっている。その点が三巻の中では異質であり、前章で述べたように、玉鬘が再登場する根拠は真木柱巻に仕掛けられていたわけで、その決着をつけた巻と言えるであろう。

星山健氏は竹河巻の研究史を概括して、「作者別人説・構想変更説への反動として以後の巻々との響き合いが強調され『源氏物語』

の一部として定位を見た後、先行部分（正編）からの連続性へと論点が移行していった[19]」という。神田龍身氏は竹河巻を「源氏時代を回顧することに徹底して賭けた巻[20]」として正編との連続性をいうが、その上で、筆者は正編から竹河巻への玉鬘の同質ならざる連続性を読み取りたい。

巻冒頭は傍線部、この物語を語り伝えた者達が紫の上に仕えた女房達から、鬚黒家に仕えた女房達に変ったことをいう。前章末で述べたように、正編で省筆された鬚黒大臣家の家政に勤しむ玉鬘の姿を描くには語り手の変更は理にかなっている。二重線部の「ひが事ども」の解釈が問題になるところだが、これについては後述する。

これは、源氏の御族にも離れたまへりし後の大殿わたりにありける悪御達の落ちとまり残れるが問はず語りしおきたるは、紫のゆかりにも似ざめれど、かの女どもの言ひけるは、「源氏の御末々にひが事どものまじりて聞こゆるは、我よりも年の数つもりほけたりける人のひが言にや」などあやしがりける、いづれかはまことならむ。（五九頁）

この直後の文では傍線部のように「故殿」という語で玉鬘の夫鬚黒太政大臣が亡くなっていたことを伝えている。

尚侍の御腹に、故殿の御子は男三人、女二人なむおはしけるを、さまざまにかしづきたてむことを思しおきてて、年月の過ぐるも心もとながりたまひしほどに、あへなく亡せたまひにしかば、夢のやうにて、いつしかと急ぎ思しし御宮仕もおこたりぬ。（五九～六〇頁）

波線部「いつしかと急ぎ思しし御宮仕もおこたりぬ」は、夫鬚黒が目指していた娘の入内は頓挫したままになった、というのだが、その使命は玉鬘と成人した息子たちに引き継がれたのである。

玉鬘は太政大臣家の未亡人として再登場するのであった。主内容は一言で言えば大君への求婚譚で、大君が主人公ならば従来の求婚譚と何ら変るところはなかろうが、そうではなく、大君の嫁ぎ先を一点に絞っていく母玉鬘が主人公の奮闘記である。選択肢としては、入内の道を選ぶか、臣下を婿にとるかであった。後者の候補は薫と蔵人少将であるが、もとよりそれは亡き夫の意向に反する。ただし、蔵人少将の両親は右大臣夕霧と雲居雁（腹違いの妹）で、その意向をいい加減に聞き流すわけにはいかなかった。前者の選択肢、今上帝、春宮へは長男、次男が母に強く勧め、冷泉院は旬を過ぎた方であり、弘徽殿女御が母の腹違いの妹であることを理由に反対した。

だが、玉鬘は冷泉帝に魅せられたことが忘れがたく、院となった今、昔のかたじけなさに報いたいとの思い捨て難く、本音は冷泉院へ入内させることであって、他の選択肢はいかに消していくかであった。

結果は、大君は女子を生むまではよかったが、次いで世継ぎのいない冷泉院に男子を生むに至って、後見役のはずの弘徽殿女御や中宮との関係が悪くなり、母玉鬘としては里邸に避難させざるを得なくなってしまう。息子たちは意向をないがしろにされた帝がお怒りであると母を非難する。結局それは息子たちの昇進に影響し、彼らは並の官職にとどめられる。玉鬘は夫亡きあとの世の辛酸を舐めさせられるのであった。

以上の筋書きが、実に写実的に描かれる作品となっている。この巻では後家となった玉鬘がこれまでの作り物語のヒロインとはうって変わり、家政を差配する現実味を帯びた人物として描かれる。今井源衛氏は、「写実的」という言葉は使わないが、次のように解説している。

> 本巻の主題は薫の恋愛というよりは、むしろ往年の美女玉鬘の中年以降は苦労の物語とでもいうべきもので、（中略）鬚黒の後家となった玉鬘が、後家の頑張りよろしく、姉娘を冷泉院に、妹娘は帝にと各奉ったのはよいが、純情の青年を泣かせたり、有力者の反対を無視したせいで、姉娘は今では里がちで、息子たちも前途思いのままにならぬを嘆いている、というすこぶる現実臭の強い内容なのであって、薫の大君への恋は、むしろ添えものにすぎないのである。（中略）一種の喜劇仕立てではあるけれど、こうした上層貴族の家庭における極めてあり得べき紛議・気苦労を書いたものといって差し支えないだろう。[21]

傍線部はまさしく後家の奮闘記であり、「すこぶる現実臭の強い内容」や「上層貴族の家庭における極めてあり得べき紛議・気苦労を書いたもの」とは写実的な作品ということと同義である。『新編』も「生態、人情の洞察にはしばしば写実的で鋭く」（一一二頁頭注）と解説している。つまり、正編の「物語の比類なきヒロイン」の成功譚から現実味を帯びた太政大臣家の後家の失敗譚へと内容・描き方が大転換する。

ここで冒頭の引用文にある「ひが事ども」の解釈問題に触れてみたい。「ひが事ども」が冷泉院や薫の出生の秘密をさすかどうかで論争となっているところである。鬚黒家に仕えた「悪御達」は「ひが事」を「ひが言」と強く否定しているわけで、それは密通のよう

な大事を指すはずだ。[22] この問題は、大君に異常な恋情を見せる蔵人少将の描写には女三の宮と柏木の物語取りがされているということと深くかかわっている。星山氏はその類似を詳細に報告している。[23] 類似箇所が多数ありながら、大君と蔵人少将に密通は起こらない。そのことから、冒頭文は、「大殿わたりにありける悪御達」は「紫のゆかり」が伝えるような密通など起こりえないと疑念を呈したとの解釈は妥当と考える。

この解釈のもとに筆者の論旨を重ねてみたい。もし、蔵人少将が密通に及んだとしたら、竹河巻の主人公は玉鬘ではなく大君と蔵人少将となるであろうし、玉鬘を描く写実性も活きないであろう。つまり、竹河巻の現実味を帯びた主人公玉鬘の姿は、密通などないとうそぶく「大殿わたりにありける悪御達」の問わず語りによって導かれたといえよう。

巻末は息子たちの出世がままならぬことへの玉鬘の恨み節で閉じられる。

「見苦しの君たちの、世の中を心のままにおごりて、官位をば何とも思はず過ぐしいますがらふや。故殿おはせましかば、ここなる人々も、かかるすさびごとにぞ、心は乱らまし」とうち泣きたまふ。右兵衛督、右大弁にて、みな非参議なるを愁はしと思へり。侍従と聞こゆめりしぞ、このころ頭中将と聞こゆめる。年齢のほどはかたはならねど、人に後ると嘆きたまへり。（一一二～一一三頁）

六条院に集う貴公子達を悩ませたヒロインの宿運かくのごとしであった。

ここで対比せざるを得ないのは、匂兵部卿巻に漏れ記された明石の君の最後の姿である。

二条院とて造り磨き、六条院の春の殿とて世にののしりし玉の台も、ただ一人の末のためなりけりと見えて、明石の御方は、あまたの宮たちの御後見をしつつ、あつかひきこえたまへり。（二〇頁）

「玉鬘物語」は正編で成功譚として完了しても読者に何の不思議もなかっただろう。むしろ失敗譚としての竹河巻が新たに作られた方が違和感がある。だが、こうして終わりの閉じ方を対比してみると、作者としては、完璧な成功譚としての「明石の君物語」に対し、「玉鬘物語」は失敗譚で終わらせるという強い意向があったと考えざるをえない。これを「源氏の同族の物語」対「内大臣家の血筋の物語」として捉えるならば、その宿運の径庭はうべなるかなと言えよう。遡れば、明石の君と玉鬘の女手の差異はこの宿運を象徴して

いたと考え至るのである。

ところで、竹河巻にも玉鬘の女手は一箇所それと分からないように織り込まれていた。経緯は省くとして、薫は大君への恋心を仄めかす歌を親しくしている藤侍従（玉鬘の三男）に贈って寄こした。波線部「見たまへと思しう仮名がちに書きて」とあるのは、母玉鬘にも大君にも読まれることを想定している。

朝に、四位侍従（薫：筆者注）のもとより、主の侍従（玉鬘の三男：筆者注）のもとに、「昨夜は、いとみだりがはしかりしを、人々いかに見たまひけん」と、見たまへと思しう仮名がちに書きて、端に、

竹河のはしうち出でしひとふしに深き心のそこは知りきや

と書きたり。寝殿に持て参りて、これかれ見たまふ。「①手なども、いとをかしうもあるかな。いかなる人、今よりかくととのひたらむ。幼くて院にも後れたてまつり、母宮のしどけなう生ほしたてたまへれど、なほ人にはまさるべきにこそはあめれ」とて、②尚侍の君は、この君たちの手などあしきことを辱めたまふ。（七四頁）

玉鬘が薫の筆跡を傍線部①「手なども、いとをかしうもあるかな」というのは、読者には薫の筆跡が実の父柏木（梅枝巻の源氏の草子づくりの一人に選ばれている）譲りであることを気づかせる記述であるが、玉鬘の方は父源氏譲りと思ったに違いなく、その見事さにただ感心するばかりか、傍線部②「尚侍の君は、この君たちの手などあしきことを辱めたまふ」と、自分の息子たちの悪筆を嘆くのであった。

玉鬘が薫の筆跡を褒めるのは源氏を回顧するよすがとして分かるが、いったい、息子達の悪筆を言い出す必要があるのだろうか。唐突感は否めない。父鬚黒の筆跡は、真木柱巻に、玉鬘を訪れようとして北の方に灰を浴びせかけられた事情を伝える文が「つつやかに書いたまへれど、ことにおかしきところもなし。手はいときよげなり」（三六七頁）とあって、生真面目な筆跡と評されている。したがって、息子達の筆跡は父の血ではなく母譲りということになる。六条院時代の玉鬘の女手は源氏をとりまく女君達の中においては並び立つ程のものではなかったが、それが母から男の子に伝わると悪筆になるということか。

七、むすび

結局、続編竹河巻において「玉鬘物語」が失敗譚として閉じられるということは、内大臣家の血筋の問題に帰結するのではなかろうか。読者は作者が内大臣家の血筋に厳しく冷徹であることを忘れてはならない。源氏に対し内大臣家は敗者という構図は貫かれなければならないのである。玉鬘は源氏に六条院のヒロインとして迎えられ、源氏の庇護下に置かれ、内大臣家に住むことは一度もないため、内大臣家の一族であることの意識が希薄となりがちである。だが、作者は「玉鬘物語」の構想を始めた最初から、玉鬘には敗者としての内大臣家一族の宿命を負わせていたと考える。そこで結びつくのが、玉鬘の登場時に与えられた芳しいとはいいかねる女手評「ほのか…」と竹河巻の失敗譚としての完結である。玉鬘の女手は内大臣家の血筋としての彼女の宿命を象徴していた。もちろん、作中人物の誰もの女手が象徴性を有するわけではないが、「明石の君物語」と「玉鬘物語」という二大物語のヒロインにおいては、その女手は物語の結末を暗示的に象徴していたのである。

注

1 拙著「『源氏物語』玉鬘巻と和歌リテラシー」『國學院大學國文學會日本文学論究』第74冊（平成二十七年三月）。

2 「源氏物語の書状」『源氏物語と和歌 研究と資料 古代文学論叢四輯』（武蔵野書院 昭和四十九年）

3 「玉鬘十帖への一視角―和歌注記をめぐって―」『源氏物語の基底と創造』（武蔵野書院平成六年）

4 河添房江「梅枝巻の手本蒐集」（『中古文学』平成三年五月）。宮川葉子「筆跡―梅枝巻の書道論―」『源氏物語の文化史的研究』（風間書房 平成九年）

5 「薄く書く和歌―『源氏物語』における「ことば」としての筆跡―」（『日本文学』平成二十七年年六月）

6 当論の『源氏物語』の本文・頁数は、『新編 日本古典文学全集』（小学館・平成六年～十年）による。なお、文中では当該書を『新

編』と略称する。

7 『源氏物語の鑑賞と基礎知識 明石』（至文堂 平成十二年）は「ほとんど明石の君専属の言葉と言える」と解説している。一〇三頁

8 注1論文

9 吉見健夫「『源氏物語』作中和歌の表現と方法―玉鬘の和歌をめぐって―」（久富木原玲編『和歌とは何か』有精堂 平成八年）

10 注5論文

11 田坂憲二「頭中将の後半生―源氏物語の政治と人間―」『源氏物語の人物と構想』（和泉書院 平成五年）

12 注5論文

13 注11書「螢宮をめぐる諸問題」

14 注5論文

15 藤井貞和「雨夜の品定めから『蛍』巻の物語論へ」（『共立女子大学紀要』18号 昭和四十九年）

16 秋山虔「『蛍』巻の物語論」（『日本文学』昭和六十一年二月）

17 神野藤昭夫「螢巻物語論場面の理論構造」（『国文学研究』第六十七集 昭和五十四年三月）。

18 陣野英則「序文 匂兵部卿・紅梅・竹河への招待―懐古される光源氏の世界―」『源氏物語の鑑賞と基礎知識 匂兵部卿・紅梅・竹河』（至文堂 平成十六年十二月）二～三頁

19 「匂宮三帖の世界 竹河巻を中心に」『源氏物語 宇治十帖の企て』（おうふう 平成十七年）

20 神田龍身「匂宮三帖の再評価―王朝時代への挽歌」『新講 源氏物語を学ぶ人のために』（世界思想社 平成七年）

21 「竹河巻は紫式部原作であろう（上）」（『文学研究』第七十二輯、九州大学文学部 昭和五十年三月）。氏の論文は、竹河巻の作者別人説を唱える石田穣二氏の論文「匂宮・紅梅・竹河の三帖をめぐって」（『国文学 解釈と鑑賞』昭和三十六年十月）に答えたものである。九五～九六頁

22 森一郎「竹河巻冒頭の方法」『源氏物語の主題と方法』（桜楓社 昭和五十四年）

23

注
19
書